



実録

松井秀喜物語

— この世でいちばん美しい宝石が何でできているか知っているかい？
— なんなの、パパ？
— 土と石灰の白いラインでできているのさ！

静まりかえっていたスタジアムがゆっくりと、しかし確かにざわめきはじめた。

そうして男は、グラウンドに足をふみ入れた。

ガシヨン。

ガシヨン。

フィールドの黒土を踏むたびに男の体から奇妙な金属音が鳴る。その音がスタジアムにこだますると観客のヤジとも歓喜ともつかぬ声は最高潮に達した。

ネクストバッターズサークルの選手はヘルメットをぬぎ、最敬礼でその男を迎えた。

はにかんだような笑顔でそれに答えた男はバッターボックスに入る直前、何かをつぶやいた。

それは祈りの言葉のように聞こえた。

男の名は松井秀喜。五十八歳、左翼手。大リーグ通産 868 本塁打。

王貞治の持つ世界本塁打記録に並んでいた彼の、メジャー復帰後、初めての打席であった。

第一部 誕生編

その赤子はオギャーとは泣かなかった。

その赤子はホームラン、と泣いた。

少なくとも父にはそう聞こえた。そう聞こえる理由が父にはあった。

その赤子は野球のボールをしつかと握りしめて母の体内からこの世に生まれいでた。

母はその理由を痛いほど理解していた。

時はこの赤子が生をうける三時間前にさかのぼる。

一九七四年八月六日午後八時三十二分、上弦の月の夜であった。
場所は東京、後樂園球場。

夫婦そろっての野球狂、マツイシゲジとマツイトモコは一塁側外野スタンドに陣取っていた。

伝統の巨人阪神戦。はるか石川県から仕事もそうそう臨月の妻をカロラの助手席に乗せ、高速を飛ばしての観戦である。

この夏ふたりは連日巨人軍の試合に同行していたのだ。

原因はいま、バッターボックスにたっている男にあった。

ビッグワン、王貞治。

のちに前人未到の本塁打世界記録 868 本を打ち立てる男である。
もちろん一九七四年の王はすでに偉大なる打者であった。

その王が苦しんでいた。極度のスランプ。最近十試合で打率〇割六厘。

本塁打にいたっては一本も放ってはいなかった。

何がそこまでこの男を苦しめたのか？

755本。

そう、王はこの年ハンクアーロンの持つ大リーグ本塁打記録に並ぼうとしていたのだ。

そしてその記録に並んだ瞬間、彼は悪魔に魅入られた。

プレッシャー。

この不世出の大打者をもってしてもその悪魔をうち破るのは困難を極めていた。

ぴくりとも打席で動けなくなる。のしかかる重圧がスイングをにぶらせる。重ねる凡打。微妙なずれを直していくうちに理想の状態からかけ離れてゆくフォーム。

酷暑である。不眠。食事がのどを通らない。みるみるうちに彼はやせ細った。体重三十七キロ。眼下に浮き出たどす黒いクマ。家から球場への移動すら困難を極める。すでに野球をやれるような状態ではない。

かつて世界で一番美しいもののひとつといわれた彼のフラミンゴ打法は、見る影もなくバッターボックスでロウ細工のようにか細く固まっていた。

八月六日。きしくも二十九年前十ロシマに人類史上はじめて原子爆弾が投下された日、彼はひとつの決意をしていた。

捨てる。今日バットを振れなかったら俺は野球を捨てる。行こう。父の国、台湾に行こう。そしてなろう。散髪屋になろう。台湾一の散髪屋になろう。

そんな白昼夢を抱き彼はバターボックスにはいったのであった。

そうして彼はこの日、神をみた。

瞬間、確かに時はとまり彼の眼にはひとつの白いボールしか映ってはいなかった。

いや、それはもはやボールですらなかった。光であった。

漆黒の闇にただひとつきらめくライト。可能性という名の光。イリュージョン。見逃すはずはなかった。

彼の目がその光をとらえる。からだだがその光に引き込まれるように動いてゆく。バットは赤子が乳房を求めるように吸い寄せられた。

己の筋肉の動き、細胞の一つ一つの動きすべてが今、彼の統制下にあった。

「主よ、我を救いたまえ」

おもわず口にでた彼の祈りはその光と一体になった。

聖なる光が真夏の夜空へほうき星のように軌跡を残す。

天頂で時を止めたかに思えたその光は、急激な加速をつけて落ちてゆく。

シゲジとトモコの待つ一塁側外野スタンドへと、突き刺さらんばかりに、もうひとつの光に向かって。

そう、トモコの観音さまへと一直線に――。

シゲジは見た。漆黒の闇の中、光の矢が己が女房の秘部へと挿入されるのを。

トモコは感じた。ひとつの祈りが己の体へ熱を帯びてはいり込んでくるのを。

それはまるで、トモコの体内に息づく新しい生命が呼び寄せたかにみえた。

王貞治、渾身の756本目の本塁打であった。

後日、シゲジはその赤子にヒデキと名をつけた。サンスクリット語で「光り」という意味である。

第二部 天命編

ざわつく外野スタンド。芝生の敷かれた外野スタンド。吹きつける柔らかな風。ゆれる球団旗。雲ひとつない五月の空。買ったばかりのグラブ。塗りこんだワックスの匂い。ぬるい生ビール。コーラ売りの声。野球帽の中年。頬から首筋へとつたう汗。一瞬の、風。乾いた打球音。凍りつく山内孝徳。静寂に包まれるスタジアム。五月の青にすいこまれ、高く、遠く、伸びていく白球。定位置のままはるか頭上を見送る左翼手。西武対南海。母の手弁当。ホームランうどん。田淵幸一。所沢西武球場。ゆつくりと外野席をこえていく打球。

永遠に手をふれた瞬間、時は動きだす。ようやく、しかし誇らし気にはしりだす打者。

つんざく歓声。嘆息。たたかれるメガホン。ゆれる球団旗。少年はひとつの真理を覚える。

ホームランは時を止める魔法。

第三部 青春編

ヒデキ、十六歳、夏。恋と肉欲の季節の到来であった。押さえども止めどなく吹きあがる熱く燃え盛る情欲。いま初めてヒデキは、野球よりも大切に思えるものに心奪われていた。ペネロペ・クルスである。同級生達が海や山へと青春を謳歌する季節をすべて野球に捧げてきたヒデキにとって未だ見ぬペネロペへの思いはある種宗教的な高みにまで達しようとしていた。

「ペネロペ・クルス、ペネロペ・クルス、ペネロペ・クリトリス：」

呪文のようにその言葉をくり返すうちにペネロペ・クルスとクリトリスの区別がつかなくなる瞬間、それが一日の中でヒデキが一番好きな時間だった。

当然野球の練習にも身が入らない。ノックを受けてはペネロペ、素振りをしてはクリトリス、ペネロペに明けクリトリスに暮れる日々。

そんな彼を心配そうに見つめる男がいた。野球部顧問、芝浦耕造である。

ヒデキを中学時代から注目し、なみいるライバル校を押し退け私立星綾高校へと入学させた手前、そんなおっぱいかぶれのヒデキを見るのは我慢ならない事であった。

ある日芝浦は意を決し練習後ヒデキを部室に呼び出した。

夏の夕陽が部室内をオレンジ色に染めている。

すえた臭いのするその室内にヒデキが入ると芝浦はパイプ椅子にどっかと腰をかけ腕組みして待っていた。

ヒデキからは芝浦の顔がちょうど影になって表情が読み取れない。

「ヒデキ：」

芝浦の重く暗い声がヒデキの胸に響いた。

「人が何かを悩むのは恥ずかしい事じゃない。もし君がよければ、俺に話してはくれないか？」

ああ、俺はこの人を悲しませているのだな。ヒデキは思った。

ヒデキ自身、野球の練習がおざなりになっていることはわかっていた。

「先生：先生にとって野球よりも大切なものってありますか」

芝浦は黙ったままヒデキを見ていた。

「先生、俺の一番古い記憶は哺乳ビンがわりに野球のボールをしゃぶった思い出です。俺の記憶には野球しかありません。海は俺にとって足腰を鍛えるために走る場所です。山は俺にとって同じく足腰を鍛えるために登る場所です。俺にとってアイドルとは王貞治の事です。では：では、俺にとってペネロペ・クルスとは何ですか！」

芝浦はそのヒデキの問いに答える事ができなかった。ヒデキの燃え盛る青の炎に対して答える術を持っていなかった。

「いま、俺の頭の中で二つのものが戦っています。ペネロペ・クルスと王選手です。二人はくんずほぐれつ戦っております。激しい戦いです。王選手はバットを片手に必死で戦っております。でも、相手は強大です。巨大なるペネロペのおっぱいにいまや、あのビッグワン、王貞治は飲み込まれようとしています。もみしだくはずの王選手が、逆にもみしだかれておるのです！」

またも芝浦は答えることができなかった。芝浦にできたのはおのれのワイシャツのボタンを外すことだけだった。

「これでは、ダメか？」

芝浦のワイシャツから疲れた、くろぐろとした乳首が顔をのぞかせた。芝浦の乳房にあたる西日がその疲れた容貌を引き立てていた。ヒデキは無性に悲しくなった。

ヒデキが宗教的な高みにまで祭り上げたペネロペ嬢の乳房、その頂点に座すべき乳首殿が、こんな場末の部室で、小汚い中年男によって冒瀆されようとしている。

しかし、同時にヒデキは芝浦のやさしさも痛い程わかっていた。ヒデキは湧いてくる悲しみを強靱な意志の力でおさえた。そしてゆっくりと左手を芝浦の乳房に伸ばした。中年特有の脂肪のついた芝浦の乳房は意外にも心地よかった。

「柔らかいか？」

芝浦が静かに尋ねた。

「はい！ やわらかいです！」

「つまんでみる」

ヒデキはゆっくりと芝浦のこげ茶色の乳首をつまみあげた。グニグニとした感覚が指先に伝わった。悲しい、感触だった。

「コリコリか？」

「はい！ …コリコリであります！」

ヒデキは嘘をついた。

「こんなもんだ」

「こんなもん、であります！」

ヒデキはそっと指先を芝浦の乳首から放した。脱力感がヒデキを包んでいた。

「二週間後、夏の甲子園地区予選がはじまる」

芝浦がワイシャツのボタンを止めながら言った。

「お前の力が必要だ」

「はい！」

「気持ちの整理がつくまで練習にはくるな」

「先生……」

「俺はお前を信じている」

芝浦はそういつて部室を出ていった。

ひとり残されたヒデキの頬を一筋の涙がつつた。

なんで自分は泣いているのだろう。

それをきっかけにほろほろ、ほろほろと幾筋もの涙がヒデキの頬を
たつてゆく。

夕暮れが涙にキラキラと乱反射して輝いていた。

甲子園の地区予選まであと三日にせまっていた。

ヒデキはいまだ心の整理がついていなかった。

かつて頭の中を占めていた偉大なる男、ビッグワンこと王貞治は巨大
なるおっぱいの谷間にはさまれて窒息寸前にまで陥っていた。

そして今日もヒデキは校舎の屋上から下校する女生徒のおっぱいの数
をかぞえていた。

「おっぱいがひとつ、おっぱいがふたつ、おっぱいがみつっ……この高校
の女生徒数を約四百人とすれば八百個のおっぱいがこの校舎で揺れ動い
るとる計算になるんや！」

ヒデキはその事実に興奮を覚えた。八百もの乳房。その乳房の海をお
もいつきり泳いでみたい。自由形で。クロールじゃない。自由形だ。
やさしくなでもよし、激しく叱りつけるもよし。腹がへるまで見つ
め続けたってかまやしない！ああ、愛しきものよ、汝の名はおっぱい！

「そんなに難しく考えることはない」
さわやか且つ嫌みのない声が背後から聞こえた。

「王選手！」

「そうだ！」

ふりむくとそこに憧れの男、王貞治がユニフォーム姿でそびえたって
いた。

「そうだ、いかにもわたしは王貞治だ。そして君は誰だ！」

「松井秀喜です！」

「そうだ！ きみは松井秀喜なんだ！」

王はその歯並びの悪い口でニツと笑った。

星陵高校の屋上で巨人軍一塁手、王貞治がフラミンゴ打法でヒデキを
見据えたまま笑っている。

不思議だとは思わなかった。驚いたのはそんなことじゃない。驚いたの
は彼の笑顔だった。邪心のかけらもない王の笑顔だった。

「無だ。この人は巨大なる無だ……」

ヒデキは思った。

「マツイくん、君の右手は何のためにある？」

王がおのれの右腕を天高く掲げながらそう言った。おもわずヒデキも
自分の右手を天高くかかげた。陽光が手の平からもれてまぶしい。

「マツイくん、君の右手は、もしかすると乳房をつかむためにある」

王は続けてもう一方の腕を高くかかげた。

「ならば、左手は何のためにある？」

ヒデキは左腕をおなじようにかかげて空を見た。おなじように太陽の光がもれてくる。

「マツイくん、難しいことじゃない。右で乳房をつかんだら、左でボールをつかみとれ！ おっぱいも野球もイコールなのだよ！」

右で乳房をつかんだら、左でボールをつかみとれ……。

「でも、王選手！ おっぱいはふた房あります！ 左でボールをつかんだら、ひと房あまっていますます！」

ヒデキが泣きそうな顔で叫んだ。瞬間、温和な王の顔がクワツと阿修羅のそれに変わった。

王はその声を聞くやいなや、全速力でヒデキへ向かって走り出した。チャカチャカと王のスパイクとコンクリが擦れる音が響き渡る。

王はそのままヒデキの脇をすり抜けると屋上の鉄柵に右手をタッチするや、もとの場所へと猛スピードで戻っていった。

息ひとつ乱れていない見事な反復ダッシュであった。

「マツイ君、残った乳房は口で吸えばいい。難しいことは何もないのだよ。君がそう信じるのならば、乳房はボールとなりボールは乳房となる」

ヒデキはその言葉に息を飲んだ。

王の言葉は続いた。

「見たまえ、下校する可憐な乙女達の胸を。あの胸は決して重力や振動によって揺れているのではない。震えているのだ。己と外界を隔てる狭

間で、嫌悪や同情、不安やときめき、世界中にあふれる悲しみ、喜び、怒り、憎しみ、名づけられた事のない幾多の感情に共鳴し、共振してうち震えているのだよ。いまいちど見るんだ、乙女たちの胸を。おれたちと同じだ。おれたちと同じように世界と対峙して、孤独にうち震えているのだよ」

ヒデキは見た。両のまなこで、乙女達のゆれる乳房を。

そうすると制服の中に閉じ込められた彼女達の乳房の形がじわじわと浮き出てくるのがわかった。

お椀型、釣り鐘型、メロン型、桜桃、レーズン、桜貝、カーブ、シュート、ストレート…。

乙女達の胸にはどんな投手にも負けない一級品の球がぶらさがり、ゆれていた。

ヒデキは見た。心秘かに思いを抱いていたナツコの下校姿を。そして見た、彼女の乳房を。

「!!」

彼女の胸には落差三十センチはあろうかという超高校球フオークボールがだらしなくぶらさがっていた。

「打てん：くやしけれど、おれには、まだ打てんです」

ヒデキはくちびるをかみしめた。

「野球や、野球がおれの恋人や」

いつか、いつの日か、あのフオークボールを躊躇なく打てるでっかい男になるまで、おれの恋人は野球だけだ。

彼は苦い思いを心に刻む。松井秀喜、十六回目の夏の出来事である。

野球教の詩①

野球とはスポーツではない。ひとつの宗教だ。一八〇〇年代の北アメリカにおいてクリケットから派生したといわれるこの宗派はルールが確立されていく過程においてその祝祭的な意味合いを増してゆく。プレイボールという言葉は祈りの言葉である。ヤンキーたちは南無妙法蓮華經のかわりにプレイボールと唱え魂の救済を求めなのだ。彼等はただぐるぐると同じ場所を走る。ダイヤモンドと呼ばれる菱形の大地を儀式のように。いや、文字どおり儀式であるのだ。野球のボールとは原罪であり、バットは罰である。生命を受けたことよって生じた原罪をメイプル木材製の罰によって贖罪しているのだ。

プレイボール、罪深き我らにせめてもの祈りを。

第四部 覚醒編

二〇〇二年十一月初旬の明け方近く、ヒデキは都内のある市営グラウンドにいた。

屋根付きのベンチに腰掛けて彼は、昨晚からずっと降り続く雨をじつと眺めていた。

その年、ヒデキはプロ入り最高の成績をおさめていた。

打率こそ中日の福留に僅差で敗れたものの、107打点での打点王、ホームランはセリーグでは、七十七年の王以来となる50本塁打を記録してのリーグ優勝。

日本シリーズでは西武相手に4連勝での日本一。シーズンMVPに文句なく選ばれた。

ヒデキが成績を残せば残す程、世間の注目はストーブリグへと集まっていた。いうまでもなく、来シーズン、マツイヒデキは大リーグへいくのか？という事である。

日本球界で彼がなすべき事が果たしてまだ残っているのか？

彼が巨人という特殊な球団の所属選手でなかったら話は簡単であったろう。

彼は巨人軍の選手である。満員の観客、連日のスポーツ紙の一面トップ記事。最高の年棒。

巨人軍の選手であるが故にすべてを手に入れる事ができた。巨人軍の選手であるがゆえにすべてを背負ってきた。

そして巨人軍の選手であるが故に彼は悩んでいた。

読売巨人軍の四番打者、それは日本野球界の核^{コア}である。

その核が日本を捨てアメリカに渡ることが許されるのか？

そうして彼は市営グラウンドのベンチで降りしきる雨をじっと眺めていたのである。

うっすらと辺りが明るくなるろうとしている。ここに座ったのは真夜中だったろう。とすれば、もう何時間ここにいるのだろうか。

そう思った時、グラウンドの彼方に一人の男がいるのにヒデキは気付いた。

小柄な男だった。

バットをかまえている。

この雨の中、こんな時間に、体を動かしている。

それが素振りだと気づくのにしばらく時間がかった。

男は一度バットをかまえるとしばらく動こうとはしないのだ。

その姿には凜とした美しさがあった。

ヒデキがその立ち姿にみとれていると、突然切り裂くようなスイングをする。

居合いに、似ていた。

いつのまにかヒデキは男のスイングに心を奪われていた。

軸がまったくぶれない。

かまえが決まるまで男は決してバットを振ろうとはしない。

十分、二十分かまえたまま微動だにしないときもあった。

ひと振り、ひと振りに怨念のようなものがこもっているかに見えた。

ヒデキがいままで見た事のない素振り法であった。

自然とヒデキの足が動いた。

ヒデキは雨に濡れるのもかまわず男の側、だが決してスイングの邪魔にならない位置へと立った。

驚いた事に男は老人であった。

七十に届くかどうかといたところ、綺麗に洗濯された黒いスウェットの上下を雨に濡らし、老人は黙々と素振りを続けた。

すっかり夜は明けていた。

老人はやがて己のスイングに満足がいったのか、フツとひとつ息を吐きバットを下ろした。

そこではじめてそばに立っているヒデキの存在に気付いた。

男はヒデキの眼をみたままじつと立っていた。

射るような眼だった。

長い静寂がふたりを包んだ。

「マツイヒデキと申します」

沈黙に耐えられずヒデキは言った。

「榎本喜八、と申します」

男の名に覚えがあった。

「あの、榎本喜八さんですか？」

老人はまったく表情を変えなかった。

「榎本喜八と申します」

榎本喜八。

長嶋、王とほぼ同世代にプロ野球人として生きた男。

安打製造機と呼ばれた男。奇人と呼ばれた男。

三十一歳七ヶ月という史上最速での2千本安打記録を作った男（註：二〇〇四年、日米通算であるがシアトル・マリナーズ所属のイチローに破られた）。

大毎オリオンズというパ・リーグの弱小球団に所属していたにもかかわらず、彼にまつわる逸話は数多く残っている。

曰く孤高の男。曰く天才。王貞治の師、荒川博がその才能にもっとも惚れ込んだと言われる男。

勝利を決める安打を放つても満足のゆく打球でなければニコリともしない。

齋下丹田に力を込めバットを振り抜く。合気打法。榎本は己の打法をそう名付けている。

日米野球の試合前、ベンチで座禅を組み精神統一をはかった事もある。榎本の奇行。

まわりはそう呼んだ。

一九六三年の夏、彼は異様な体験をする。

己が理想とするイメージに突如、身体が追いついた。

精神と肉体との一致。

七月十四日から三十一日までの二週間、彼は打ちに打ちまくった。

アウトであろうがヒットであろうがその打球はほぼ真芯をとらえた。

打率五割五分八厘。

彼曰く、「神の域」を体験した。

その黄金の季節は左足首の怪我によりあっけなく終わる。そして二度と、その感覚を彼が体験することは無かった。

2千本安打達成から数年後、風船がしばむように彼の成績は降下をはじめめる。

肉体が精神を裏切りはじめたのだ。

一九七二年、男は突如として引退する。

名球会入りを拒否した彼は野球界からひっそり姿を消した。

数年たった後、あるルポライターが引退後の彼を訪ねた。にべもなくインタビュウを断られる。

そのルポライターは周辺を取材してある事実には驚愕する。

現役時代、自らに課していた過酷なトレーニングを現在も彼は欠かしていないのだ。

異常とも思える走り込み。素振り。

たったひとりで、だ。

引退後の大選手のサロンともいえる名球会入りの拒否、己に課した過酷な訓練。

ようするに彼は、引退することを拒否したのだ。

つかみかけ、すんでのところであつた黄金の季節、あの感覚をもう一度手に入れるため。

黙々と、黙々と市営グラウンドを走り続けていたのだ。

それから二十年近く。

その榎本がヒデキの前に立っていた。

裏切った肉体を許さぬまま、永遠の罪を償い続けるかのように彼は屹立していた。

痩せこけた頬、他人を拒絶するかのような目つき。それはひとりの修羅の姿であった。

ドン。

ヒデキの胸の内に荒々しい鼓動が脈打っていた。

ドン、ドドン。

鼓動がヒデキの体内を侵食し始めていた。

ドン、ドン、ドドン、ドドンドドン。

鼓動は軽妙なりズムに乗ってヒデキの周囲の風景を侵しはじめた。

「待っておった」

空気を裂くような、かん高い声だった。

「お前が来るのを待っておった」

老人は鋭すぎる視線のまま、ヒデキを見つめた。

「ぼくを、待っていたか？」

「そう、ずっとずっと、お前が来るのを待っておった」

「何のために？」

「これのためや」

老人はそういうとふところから汚い毛だらけの球をヒデキに差し出した。

ひどい悪臭があたりに漂った。ヒデキはおもわず顔をそむけた。

「何です、それ？」

スーシンチュウ
「四星球や」

ぼそりと榎本が言った

「あの、スーシンチュウ？」

「そうや、七つの球集いしとき、どんな願いでもひとつだけ叶える事ができるであろう、の四星球や」

榎本はヒデキの顔へそれを近づけてくる。生臭いものが鼻孔を襲う。

ヒデキが嫌々その臭い臭い球を受け取ろうと手を伸ばした時、榎本が言った。

「そして俺が孫悟空や！」

「ええっ！」

ヒデキが驚いたその瞬間、氷のような榎本の顔がクワツと阿修羅のそれに変わった。

「嘘やっ！」

言うや否や、榎本は右のこぶしでヒデキのこめかみをしたたかに殴りつけた。

不意をつかれ地面に突っ伏したヒデキを榎本が見下ろしている。

その表情は七十を過ぎた疲れた老人の顔になっていた。

ヒデキは無言のまま榎本を見つめた。

スツと榎本の手が伸び、ヒデキの鼻先にさきほどの球を近づけて言った。

「待っておった」

ヒデキはゴクリとツバを飲んだ。

「お前が来るのをずっと、ずっと待っておった」

「なぜ、ぼくを？」

「誰からも惜しまれて、美しく辞めていく。キャリアに傷をつけたくないのなら、そんな生き方を選ぶ事もできる。力のある選手ほどその晩年の選手生活はみじめにみえるものだ」

「ぼくも、そんな道を歩むと？」

「モハメドアリの三度目のカムバック、果たしてそれは金が目的だけだったであろうか。落合博満の日本ハム時代は余計なものだったであろうか。江夏豊の三十六歳での大リーグへの挑戦は無意味な戦いだったろうか」

榎本の言葉は、まるで榎本自身に語りかけているかのようにヒデキには聞こえた。

「彼らの戦いが価値あるものかどうかは、彼ら自身が決める事だ」

榎本が臭い球をさらに近づけた。毛だらけの球がヒデキの鼻先にあたり、さらにぐいぐいと押しつけられた。

生暖かい、少し湿り気のある柔らかな感触と強烈な異臭が鼻の機能を麻痺させる。

「何ですか、それは？」

榎本の眼が青白い燐光を放った。

周囲の空気が「グニヤリ」と確かに歪んだ。

「金玉や！」

「ええっ！」

瞬間、榎本の表情がクワツと阿修羅のそれになった。

榎本はヒデキのサラサラの前髪をつかむと木製バットのグリップエンドでヒデキの顔をこづき倒した。

「嘘や！ 屁えこいて死ね!!」

そういうと榎本はその臭い球をふところに戻してさっさと何処かへ去っていった。

ヒデキはグラウンドに血まみれになって伸びた。

薄れゆくその意識に血の匂いと毛だらけの球の臭いだけが混じりあつて残っていた。

「金玉や。金玉の匂いや」

両の眼からふいに涙がこぼれた。鼻に残る刺激臭のせいなのか悲しさのせいなのかはわからなかった。

いつのまにか雨は止んでいた。

第五部 放浪編

北欧製のキッチンテーブルに置かれたマイセンの陶器。それに注がれたシナモンシュガー入りカップチーノの茶味がかった泡をヒデキはじつと眺めていた。

紫のベルベット製ガウンの下は真っ裸である。

「…」

年いかぬ子供が昆虫を日の暮れるまで眺めるようにヒデキはカップチーノの泡を眺めていた。

その頃の彼は何か気になるものがあると飽くことなくそれをじつと眺めるといふ、三十も半ばを過ぎた大人にしてはいささか奇妙な行為にとりつかれていた。

「ハアーツ」

そうして深いため息をつく。

「冷めちゃうぞい、そんなに見つめるとコーヒーが冷めちゃうぞい」

シャワーから戻ってきたグロリアが黄金色の髪を櫛でとかしながら近づいてきた。

思えば昨日は激しい夜だった。昨晚のファイトは久々に戦役リストに入れてもいい。よし、いいぞ。

これは、と思えたセックスを過去の歴史上の戦役になぞらえてグラフを作成すること。

ヒデキが大人になってから覚えた秘かな楽しみである。

そして昨晚の激しい交わり。ヒデキの肉柱が容赦なくグロリアの秘壺

を攻め立てた戦い。

武田勝頼の騎馬隊が織田信長の鉄砲隊になす術なく敗れたあのいくさの名がびつたりだ。

長篠の戦いと名づけよう。

昨夜のセックスに思いをよせ自然に口元がにんまりとしてくる。ヒデキの広い背中から分厚い胸板へグロリアの華奢で白い二の腕が伸びてくる。

弾力のある乳房のふくらみを背中に感じる。

鼻をツンと刺激するかすかな腋臭がまどろむヒデキの脳細胞を活性化させる。

「グロリア、グロリア」

松井秀喜の大リーガーの一日がこうして今日もはじまる。

大リーグはNYヤンキースに入団したヒデキは順調にそのキャリアを積んでいった。

20本、30本、40本。月日を重ねるごとにヒデキのホームラン数は伸びていった。

そうして二十年近くがたった。

いまやヒデキは押しも押されもせぬヤンキースの主砲、ニューヨークの王として君臨していた。

そして遂に大リーグ通算755本塁打、ハンクアーロンの保持する大リーグ通算本塁打記録に並ぼうとしていた。

その頃彼にはひとり少年の友人がいた。

黒人のバットボーイ。

勝負のかかった試合でナーバスになり過ぎてしまう時、彼をからかって遊ぶのがヒデキのリラックス法であった。

白い歯をニツと輝かせて笑う十二歳の少年、その、彼が懇願していた。アーロンの記録を抜かないでほしい。はつきりと言われたわけではなかった。

むしろ逆だった。

アーロンは僕にとって英雄だけれども、ヒデキに破られるならしょうがない、そう言われたのだ。

その言葉が何故かひっかかった。

わずかなひっかかりだったものは日を追うごとに広がってゆく。

果たして、おれは、望まれているのか？

メジャーリーグで日本人の俺がホームラン記録を塗り替えることは望まれている事なのか？

彼がその記録に近づく度に無言電話の数が増える。

グラウンドでの歓声が罵倒に聞こえる。

新聞の記事はすべて彼へのバッシングに見える。

そして、彼がその記録にやらんだ夜、少年が祝福にやってきた。彼の笑顔はひきつっていた。

いや、そう見えただけかもしれない。けれどその笑顔を見た時、ヒデキは虚無に襲われた。

その日の帰り道、事故は起こった。
何気ないゆるいカーブ。

ヒデキの真っ赤なフェラーリテストタロツサはそのまま直進して側道の
コンクリート塀に突っ込んだ。

すっぽ抜けのスローカーブがコースを外れてゆくように。

地獄のドライブ（時速250キロ）

閉ざされた扉（野球よ、野球よ）

虎になれ！（榎本ふたたび）

失われた名医を求めて（放浪者）

マッドドクターとの出会いと改造手術（メカゴジラ誕生）

サーカス小屋での生活／ボールパークから遠くはなれて

伝説のバット（いざチベットへ）

女体暗黒祭（御神木をなぎ倒せ！）

Boy backs in town（ゴジラがタンクでやってきた！）

カンバック#1（独立リーグ編）

カンバック#2（大リーグ編）

野球教の詩②

審判がキリスト教における神官にあたるならば、ルールブックは新約聖書であるといえよう。

では旧約聖書にあたる存在はなにか？それは野球創世記に大リーグたちが残した伝説の数々といえる。ベールースの予告ホームラン、タイカップの4千本安打、サイヤング、ミッキーマントルの驚異的な飛距離、ジョーデイマジオの逸話、神話なき国アメリカでそれらの伝説は民衆によりそぎ落とされ、継ぎ足され、完璧なるお伽話となって語り継がれる。

いつの日か神々の仲間入りをするであろう若き殉教者の姿を探しに、我々はまたスタジアムへと足を運ぶのだ。

第六部 解脱編

ついにヒデキは大リーグに戻ってきた。

経営不振に悩むパドレスがシーズン終盤、客寄せパンダとして人類初のメカ野球選手、ヒデキマツイを雇ったのだ。

五十八歳。

肉体は見事にヒデキを裏切った。

度重なる改造手術はヒデキから走力を奪った。

いまや歩く事がやっとの身体だった。

コー、ホー。コー、ホー。

ヒデキの人工声帯から呼吸音が洩れ聞こえる。

膝に埋め込まれた数々のメタル機器はヒデキが歩く度に重い金属音を辺りに鳴り響かせた。

大リーグ復帰後、初の打席。

ガシヨン。

ガシヨン。

静まりかえっていたスタジアムがゆっくりと、しかし確かにざわめきはじめる。そうして男は、グラウンドに足をふみいれた。

ガシヨン。

ガシヨン。

フィールドの黒土を踏むたびに奇妙な金属音が鳴る。

その金属音がスタジアムに鳴り響くと観客のヤジとも歓喜ともつかぬ声は最高潮に達した。

ネクストバッターズサークルの選手がヘルメットをぬぎ最敬礼でその男を迎えた。

はにかんだような笑顔でそれに答えた男はバッターボックスに入る直前、何かをつぶやいた。

不思議と心が高揚することはない。

まるで何年も前からこの場所で過ごしていたかのように思える。

ガシヨン。

ガシヨン。

つたない足取りで男はバッターボックスに入ってゆく。

感情を薄める事なく生きてきた。

その数々の思いはバッターボックスに立つと、サラサラと洗い流されるように消えていった。

どうでもいい、とさえ感じた。

感じる事さえ、感じなくなつた。

ただ、きた球を、打つ。

頭上で星が瞬いている。ナイターだ。夏の終わりを告げる肌寒い風がグラウンドを通り過ぎてゆく。

シーズンはすでにヤンキースの優勝が決まっていた。

けれども、やはりそんな事はどうでもよかつた。

ピッチャーがセットポジションから球を投じる。
流れるような美しいレフトハンドのサイドスロー。
糸を引くような伸びが胸もとをえぐる。

ターン！

キャッチャーミットの革の乾いた音がスタジアムに響く。
インハイへの、どストレート。

アンパイアが右手をさっと横に出す。

ボール。

調子は悪くない。見えている。

相手投手の挑発を軽くやりすぎすとヒデキは首をいつものようにチツク気味に動かした。

第二投、対角線上から投げられたボールはまたもヒデキの胸元へと伸びてゆく。

ピクリと反応するバット。

しかしボールはそこからえげつない角度で外角へと曲がり落ち、ヒデキの *mizuno* は空を斬る。

アウトローのスライダー。

1・1。

じつとりと汗がふきだす。

いったんバッターボックスを外し、呼吸を整える。

インハイのストレート。
アウトローのスライダー。

二十数年ぶりに大リーグに復帰したヒデキに相手投手の球種のデータなどもちろんない。

ただ、きた球を、打つ。

セットポジションから水鳥を連想させる美しいフォームで第三球が投げられた刹那、それは起こった。

球がピッチャーの手元から放たれる、まさに、その時、ヒデキの脳内でひとつのニューロンが閃光を放ちスパークを起こした。

パルスはシナプスを経由して別のニューロンへと伝導し、さらにまた別のニューロンへとつながる。

無限連鎖で脳内パルスは加速を起こし、ニューロンがつながる度に彼の細胞が体験したすべての出来事、彼の細胞が思考したすべての物事が呼び起こされる。

全体性の獲得、忘れてしまった記憶、肉体の記憶、捨て去った記憶、膨大な量の肉体と精神の記憶。反射する肉体精神は光の速度を帯びて。

それは彼がこの世に生まれいでる直前、王貞治の756号本塁打を母の胎内で握りしめた時をとおりに超し、シゲジの精子とトモコの卵子がつながりあったその刹那までの根こそぎすべてを呼び起こした。ヒデキの脳内にある140億のニューロンはこうして、完璧な角度でつながる。肉体と精神の完全なる一致。精神の肉体への完全なる飼育。肉体の精神への完全なる飼育。完全体。

そして世界はすべてマツイヒデキとなった。すべてがMとなった。投手はヒデキとなり、ボールはヒデキとなった。バットはヒデキとなり、ヒデキはヒデキとなった。捕手はヒデキとなり、アンパイアはヒデキと

なった。一塁手はヒデキとなり、二塁手はヒデキとなった。三塁手はヒデキとなり、遊撃手はヒデキとなった。右翼主はヒデキとなり中堅手も左翼手もまたヒデキだった。ファーストベースがヒデキならセカンドベースもヒデキだった。サードベースはヒデキでありホームベースですらヒデキだった。

ブルペンでヒデキがヒデキに向かって投球練習をしていた。ダグアウトで十八人のヒデキが戦況を見つめていた。

それにヤジを飛ばすのがヒデキならそれをなだめるのもヒデキだった。実況をするのがヒデキなら解説をするのもヒデキだった。

そしてスタンドを埋め尽くす五万二千人のマツイヒデキ。もちろん、TVの向こう側には幾千万のヒデキがヒデキを片手に口角泡をとばしている！

ヒデキがヒデキに向かって投げたヒデキをヒデキのヒデキが切り裂くようにヒデキした。

「^{ホーム}Ω（＝ホームラン）！」

真芯をたたかれたヒデキがゴムのように形を変えて夏の余韻を残す夜空、幾万ものヒデキがキラキラと輝くヒデキへと飛んでゆく。

その滞空時間は遙か宇宙の果て、永遠へと続くかにヒデキには思えた。

そして、時は動き出す。

がっくりと肩を落とす投手。

定位置から一歩も動かずに遙か上空を見上げる左翼手。

静寂から歓喜と落胆の坩堝で立ち上がる数万の観客達。

コーラ売りもホットドック売りも我を忘れて何かを叫ぶ。

ああ、これはいつか見た風景だ。

こんなときはどうすればいいんだっけ？

幼き日の記憶を手繰り寄せ、ヒデキはゆつくりと、しかし誇らしげに歩き出す。

ガシヨン！

歓喜と嘆息のスタジアムに重い金属音が鳴り響く。

ガシヨン！

あわてる必要はない。

ホームランは時をとめる魔法なのだから。

(了)